

空前の豪雨で球磨川が大氾濫



災害翌日の人吉市九日町通り

青井阿蘇神社（国宝）の楼門や拝殿も1.5mほど浸水しました。1200年の歴史を持つ同神社の記録に、浸水被害の記録はありません。今回の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大でした。

人吉市など下流域が浸水しているさなか、球磨川上流の市房ダムは7月4日午前9時半から緊急放流を開始すると熊本県が発表。各報道機関は下流の住民に対し、ダム緊急放流による水位の急激な上昇から命を守るよう、繰り返し警戒を呼び掛けていました。直前で市房ダム上流の降雨が弱まり、緊急放流はどうか回避できたようですが、ダムは緊急時には、流域住民の生命財産を奪うものであることが、改めて明らかになりました。

もし川辺川ダムが存在し、線状降水帯による今回のような記録的な豪雨が川辺川ダムの集水域を襲えば、ダムは満水となり、緊急放流をしていたのは明らかです。

線状降水帯による、これまでに経験したことがないような異常降雨が毎年のように各地で発生しています。ダムと連続堤防で洪水を川に閉じ込めようとするこれまでの「治水」のあり方を根本的に変えるべきです。

7月4日、球磨川流域は空前の豪雨に見舞われ、流域各所で氾濫。多くの方々が亡くなくなりました。被災された皆様、お亡くなりになられた皆様に、深くお見舞いお悔やみ申し上げます。

地球温暖化がもたらす線状降水帯が球磨川流域に長時間流れ続け、空前の豪雨となりました。人吉の球磨川の水位は、観測史上最高の5.05m（昭和40年7月3日）を大きく上回る7.25mを記録。



検証・7月4日球磨川大洪水

(1)空前の雨量

地球温暖化がもたらす海からの多量の水蒸気が積乱雲を連続発生させ、線状降水帯となり、球磨川流域に長時間流れ続けました。球磨川流域の大半の観測ポイントで、わずか9時間に300～400ミリ前後の降雨がありました。今回のように、球磨川全域で猛烈な桁外れの雨が長時間降り続くことは、かつてなかったことです。

今回の災害は、地球温暖化による「人災」だとも言えます。地球温暖化が続く限り、このような豪雨災害は日本中どこでも起こりうることです。

(2)球磨川の氾濫

線状降水帯による空前の豪雨で球磨川は短時間で満杯となり、各支流の洪水が本流にはけきれずに氾濫が始まりました。人吉市中心部の九日町への浸水は、まず山田川（支流）から始まり、午前9時頃には誰も予想できなかった球磨川本流からの大氾濫が始まり、ピークは9時50分頃でした。昭和40年7月3日の洪水水位を2mも上回る、かつてない浸水でした。

川辺川、小さで川、万江川、小川などの支流でも、球磨川の水位が高いため本流にはけきれずに越水したようです。球磨川が狭くなる人吉盆地の下流に行くほど洪水水位は高くなり、特に球磨村渡地区では、近年設置された排水ポンプや「導流堤」も全く役に立たない、桁外れの浸水でした。

(3)これまで私達は球磨川をどのように変えてきたのか

今回の洪水まで、私たちは「洪水が球磨川の堤防を越えることはあるまい」と思っていました。ところが今回は、その堤防を2mも3mも超える洪水が来たわけです。堤防を数10センチ上回るくらいならば、堤防は被害も抑え、逃げる時間も確保できたかもしれません。しかし3mも超えると、ダムの非常放水と同じで、あっという間に水位が上がる一因にもなったと考えられます。何より堤防があることで安心していただけで、避難が遅れた例も多かったようです。また、堤防ができたために水害後に水がいつまでもはけなくて、昭和40年洪水の時は水が引くとともに泥もかき出せたのが、それもできなかった地区も多かったようです。

人吉市七地地区や相良村の川辺川では、「国土強靱化」で洪水を流れやすくするという名目で、水害防備林（河畔の樹林帯）を切ってしまったことで、洪水の流速を強め土砂を流入させるなど、被害を拡大させています。

これまで流域の山林の溪流も、農業用水路も、球磨川の支流も本流も、少しでも早く洪水を下流に流すために直線化され、護岸はコンクリートで固められてきました。ところが人吉盆地の出口は川幅が狭くなり、流れがはけきれないために、人吉盆地下流ではかつてない速さで洪水の水位が上

昇したと考えられます。

(4) 緊急放流しようとした市房ダム

「球磨川が氾濫している最中にダム放流とは何事だ！」今回、甚大な被害を受けた人吉住民の怒りの声です。結果的には市房ダム上流の豪雨が弱まったために、ダム緊急放流は回避できたようです。被災した人たちから「ダム放流が無くてよかった」「もし放流されていたら、どんなに大変なことになっていたことか」などの話を多く耳にしました。

ダムは緊急時には、流域住民の生命財産を奪うものであることを、住民は過去の災害で体験しています。人吉ではこれまで、水害体験者が先頭に立って川辺川ダムに反対してきました。

今回の洪水では、川辺川流域の降雨は球磨川本川の降雨と比べ、そこまで大きくなかったようですが、もし川辺川ダムが存在し、線状降水帯による今回のような豪雨が川辺川ダムの集水域を襲えば、ダムは満水となり、緊急放流をしていたのは明らかです。

今、ネット上では「川辺川ダムがあれば人吉の水害は防ぐことが出来た」というような宣伝を多く目にしますが、今回の球磨川水害の原因や地元の実情を知っているのか、科学的な検証に基づいたものなのかと感じます。

(5) 今後求められる災害対策

今回の球磨川の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大で、国の想定(河川整備基本方針)を大きく上回っています。これまで国は、何十年かに一度起きると考えられる洪水を「想定」してダムや堤防をつくり続けてきました。しかし今回は、その「想定」をはるかに上回る豪雨でした。ダムと堤防に頼るこれまでの治水対策の在り方は、一新すべきです。

私たち住民にとっても、これまでの経験が全く役に立たなかった今回の豪雨災害は、全くの「想定外」だったとも言えます。

今後は、どんな規模の洪水が来ても被害を最小限度に収める災害対策が必要です。国土交通省も7月6日、洪水や巨大地震に備える防災・減災総合対策を公表し、堤防やダムだけに頼らず、土地利用規制、避難体制の強化などを含む「流域治水」への転換を明記しています。「想定以上」の洪水で満水となり、緊急放流を行うダムによる治水は、必然的に今後の洪水対策から除外されるべきです。

球磨川ではこれまで、少しでも早く洪水を流すために、山林の溪流から本流まで直線化が行われてきました。今後は、流域全体で洪水をゆっくり流すことで、人吉盆地下流部への洪水の集中を防ぐ(洪水のピーク流量を下げる)ことが必要です。田んぼの貯水機能の活用、水害防備林(樹林帯)の復活、浸水する可能性のある地区の嵩上げや移転など、総合的な地域づくりを進めていくことも必要だと思えます。

●2019年7月～2020年7月の出来事・活動報告

- 19. 9. 1 第23回川辺川現地調査。100名参加（人吉市東西コミセン）
- 19. 9. 17 「県民の会」が国土交通省、熊本県に対し現実的な治水対策を求める要請書を提出。
 - 11. 13 球磨川治水対策協議会、治水対策案の組合せ10案を了承
- 20. 1. 12 川辺川ダム反対住民団体新年会。100名参加（東西コミセン）
 - 2. 11 川辺川利水訴訟弁護団長の板井優弁護士が死去
 - 7. 4 線状降水帯による空前の豪雨で、球磨川がかつてない氾濫

●浸水した東西コミセンは避難所だった

「常日頃から川に親しみ、川の様子を見る」ことが、防災には最も重要です。手渡す会は、人吉市の避難場所の一つである東西コミセンは、非常に低い土地にあり、山田川があふれたら一番危険なところであると指摘し、国・県・市に意見書を提出してきました。人吉市は今回の豪雨直前に、避難場所を人吉東小学校に変更し、東西コミセンは1階が浸水しました。

●早く流す治水から ゆっくり流す治水へ

これまでのどんな開発が災害を拡大させたのか、明らかにしていく必要があります。九州大学工学研究院の島谷幸宏教授（元国土交通省技術者）らによる「球磨川流域の持続的発展のための流域治水に関する提言～早く流す治水から ゆっくり流す治水へ」から抜粋したものを掲載します。

~~~~~

【抜粋】洪水の到達時間が長くなるとピーク流量は減少することがわかる。これは、電車通勤で時差出勤をすると混雑度が減るのと同じ理屈である。今回提言する治水対策の肝は洪水到達時間を長くすることである。それによってピーク流量を低減させる。球磨川では球磨盆地内の本流、支流、水田、山地の水路等の整備により流出が早くなっていると思われる。そこで、それぞれの場所で3割程度到達時間を長くすることを目標とする。それにより、ピーク流量を2-3割程度減少させ、川辺川とのピークの重なりを防ぎ、かつ避難の時間も稼ぎ、洪水を軽減する。

**編集後記** 今回の豪雨災害で、「手渡す会」のスタッフも被災したり、被災者を支援したりで、今回は会計報告が間に合いませんでした。人吉郵便局も被災しており、会報は熊本市内から発送しました。今年度の会費振込用紙を同封させていただきました。ご協力のほど、よろしくお願い致します。今後、川辺川ダム問題が再燃することが考えられます。新たに危険なダムを造るのではなく、山林や農地を含む球磨川全流域と全ての支川に目を向けた防災を考えていくべきです。(N.O.)